

大学新入生の自律的進学動機が 大学生活への適応に及ぼす影響

大久保 智 生（香川大学教育学部准教授）
川 田 学（香川大学教育学部准教授）
江 村 早 紀（香川大学大学院教育学研究科1年）
折 田 祐 希（香川大学教育学部4年）

問題と目的

日本の大学進学率は1987年度に24.7%、1997年度に34.9%、2007年度に47.2%と年々上昇傾向にあり、大学はエリート教育の場から大衆化された教育の場へと変化してきた。このような現状を考えると、多様な学生が大学に入学していくようになり、学生の大学への進学動機も多様になってきていると推察される（半澤, 2006）。こうした中で、学生の大学生活への適応の問題も多様になってきている（大久保, 2004）ことからも、どのような動機で大学へ進学したのかに焦点を当てて大学生活への適応の問題にアプローチする必要があると考えられる（半澤, 2002）。

これまで、大学進学動機と大学生活への適応の関連を検討した研究は数多く行われてきた（例えば、安達, 1999; 磯部・上村, 2007; 松島・尾崎, 2007; 二宮・高橋・桑村・稻葉・山本・宮沢, 2006; 佐藤, 2001）。そして、これらの先行研究から、積極的な動機で進学した学生は大学生活に適応しやすく、消極的な動機で進学した学生は大学生活に適応しにくいことが明らかになっている。

しかし、これらの先行研究では、調査実施時点での進学動機が大学生活への適応と関連することが示されているが、調査実施時点での進学動機は想起された進学動機であり、大学生活に適応していく中で高校時代の進学動機や入学時の進学動機とは異なっている可能性がある。したがって、半澤（2009）が指摘しているように、こうした進学動機の変化の可能性も考慮して、大学生活への適応の問題にアプローチする必要があるだろう。

さて、本研究では動機づけ理論の中でも近年、注目されている自己決定理論に基づいて進学動機をとらえることとする。自己決定理論とは、Deci & Ryan (1985, 1991) の内発的動機づけに関する一連の研究をまとめたものである (Ryan & Deci, 2000)。Deci & Ryan (1985, 1991) は内発的動機づけと外発的動機づけは明確に分かれているものではなく、自己決定性（自律性）の程度によって区分できると主張している。そして、Ryan & Deci (2000) は、動機づけの中に調整スタイルという下位概念を想定し、より非自己決定的な調整スタイルから順に、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、統合的調整、内発的調整と分類している。こうした自己決定理論から進学動機をとらえると、積極的な進学動機は自律性の高い動機と考えられ、消極的な進学動機は自律性の低い動機と考えられる。加えて、自己決定理論に基づいた研究では、自律的動機と適応の関連が示唆されており、(例えば、Kasser & Ryan, 1999; 永作・新井, 2005; Ryan, Rigby & King, 1993)、自律的動機に基づいて大学に進学した学生の方が大学生活への適応が高いと考えられている。本研究では、こうした自律的進学動

機の測定については、永作・新井（2003）が作成した自律的高校進学動機尺度を一部改変したもの用いて行う。永作・新井（2003）の自律的高校進学動機尺度を改変して自律的進学動機の測定を行う理由は、自己決定理論を基に作成された尺度であり、永作・新井（2005）の研究で高校生を対象に進学動機と適応について縦断的な検討を行われているからである。

一方、大学生活への適応は、適応状態に影響を与えると考えられる大学生活の要因と適応状態の指標である適応感に分けて測定を行う。大学生活の要因の測定については、大久保・青柳（2004）が作成した中高生用学校生活尺度、適応感の測定については大久保・青柳（2003）が作成した大学生用適応感尺度を用いて行う。大久保・青柳（2004）の中高生用学校生活尺度を用いて大学生活の要因の測定を行う理由は、大学生を対象とした磯部・上村（2007）の研究で用いられており、適応感との関連が明らかになっているからである。大久保・青柳（2003）の大学生用適応感尺度を用いて適応感の測定を行う理由は、個人と環境の関係の変化に伴い尺度の得点が変化すること（大久保・青柳, 2005a, b）が明らかになっているからである。また、本研究では、大学生活への適応を大学生活と適応感との関係からとらえるが、その理由は進学動機の違いによって、大学生活の要因が大学への適応感に与える影響の構造が異なると考えられるからである。本研究のように、進学動機の違いによってどのような大学生活の要因が適応感に影響を及ぼしているのかを検討することは、どの領域を大学側が支援や援助していくべきなのかについての一つの指針になると考えられる。

以上を踏まえて、本研究では、大学生活への適応の問題と直面する大学新入生を対象とし、自律的進学動機と大学生活への適応との関連を縦断的に検討する。測定する二時点は、入学当初の4月と大学生活に慣れたと考えられる7月である。具体的には、まず、4月と7月において自律的進学動機と適応感がどのように変化し、関連するのかについて検討する。次に、自律的進学動機の得点から群分けを行い、群ごとに大学生活の要因と大学への適応感に違いがあるのかを検討する。最後に、群ごとに大学生活の要因が大学への適応感にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

方法

調査協力者と手続き

入学直後の4月の前期1回目と7月の前期最後の講義時間を利用して、香川大学に通う大学1年生306名（男性151名、女性155名）に対して質問紙調査を実施した。所属学部は、教育学部が70名、法学部が55名、経済学部が125名、工学部が39名、農学部が4名、医学部が13名であった。調査協力者の同定については、フェイスシートへ学籍番号と誕生日の記入を求めて行った。4月、7月の両方の質問紙に回答した者は173名（男性78名、女性95名）であった。なお、調査協力者に当該講義の成績とは関連がないことや外部に回答結果が漏れないこと、調査協力者の回答は研究成果の発表にのみ使用されることを伝えることで、倫理面への配慮を行った。

質問紙の構成

①自律的進学動機尺度：永作・新井（2003）が作成した自律的高校進学動機尺度を大学生用に修正した自律的進学動機尺度32項目を作成した。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

②適応感尺度：大久保・青柳（2003）が作成した大学生用適応感尺度29項目を使用した。回答形

式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

③大学生活尺度：大久保・青柳（2004）が作成した中高生用学校生活尺度21項目に、岡田（2008）の学校生活下位領域に対する意識尺度の「部活動」の項目を「サークルと部活動」に修正した6項目を加えた大学生活尺度27項目を作成した。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

各時期の質問紙の構成は、4月が①②、7月が①②③であった。

結果と考察

自律的進学動機尺度の検討

自律的進学動機尺度32項目に対して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、因子負荷量の絶対値0.4以上を基準に、3因子19項目を採用した（Table 1）。第1因子は、「大学に行かないと恥ずかしいから」や「大学には行かなければならないものだから」、「勉強しないと恥ずかしいから」などからなっているので、「外的・取り入れ的調整」因子と解釈した。第2因子は、「この大学の雰囲気が良いと思ったから」や「この大学が気に入ったから」、「この大学が好きだから」などからなっているので、「統合的・内的調整」因子と解釈した。第3因子は、「大学に進学してから就職したいと思ったから」や「大学というものが楽しそうだったから」、「大学は楽しいと思ったから」などからなっているので、「同一化的調整」因子と解釈した。したがって、永作・新井（2003）の自律的高校進学動機尺度とほぼ同様の項目からなる3因子が抽出された。

尺度の信頼性を求めたところ、クロンバッックの α 係数は、第1因子が.846、第2因子が.874、第3因子が.734であった。したがって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。なお、各因子に含まれる項目の得点を合計し、それぞれ「外的・取り入れ的調整」得点、「統合的・内的調整」得点、「同一化的調整」得点とした。

Table 1 自律的進学動機尺度因子分析結果

質問項目	因子負荷量		
	I	II	III
I 外的・取り入れ的調整 ($\alpha=.846$)			
大学に行かないと恥ずかしいから	.791	.016	.005
大学には行かなければならぬものだから	.788	.025	-.011
勉強しないと恥ずかしいから	.701	.081	-.009
普通は大学に行くものだから	.612	-.057	.228
みんなが行くから	.604	-.021	-.029
親や保護者が行けというから	.569	.143	-.091
先生が行けと言ったから	.519	.147	-.283
高卒では嫌だから	-.507	-.116	.338
II 統合的・内的調整 ($\alpha=.874$)			
この大学の雰囲気が良いと思ったから	-.036	.873	-.045
この大学が気に入ったから	.029	.860	.066
この大学が好きだから	.092	.825	-.019
説明会や情報誌などで調べて良いと思ったから	.008	.742	-.061
行事が面白そうだから	.101	.543	.056
III 同一化的調整 ($\alpha=.734$)			
大学に進学してから就職したいと思ったから	-.044	.039	.654
大学というものが楽しそうだったから	-.199	.246	.642
大学は楽しいと思ったから	-.197	.248	.629
大学に行っておけば将来の選択の幅が広がるから	.032	-.138	.525
大学までは行っておいた方がいいと思ったから	.386	-.075	.481
就職のための勉強をしたいと思ったから	.133	-.079	.424
因子間相関			
I			
II			
III			
	.332	.269	

大学生活尺度の検討

大学生活尺度27項目に対して、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を基準に、4因子24項目を採用した（Table 2）。第1因子は、「仲の良い友人がたくさんいる」や「気軽に話しかける友人がたくさんいる」、「悩みを打ち明けあえる友人がいる」など、友人との良い関係を表す項目からなっているので、「友人との関係」因子と解釈した。第2因子は、「先生は学生の相談にのってくれる」や「先生は学生の言うことを真剣に聞いてくれる」、「先生は学生の気持ちをわかってくれる」など、教員との良い関係を表す項目からなっているので、「教員との関係」因子と解釈した。第3因子は、「サークルや部活動には自主的に参加している」や「自分のサークルや部活動は希望して入った所である」、「サークルや部活動をやることにやりがいを感じる」など、サークルや部活動に対する取り組みを表す項目からなっているので、「サークル・部活動」因子と解釈した。第4因子は、「成績を上げるために努力をしている」や「一生懸命勉強している」、「勉強に楽しく取り組んでいる」など、学業に対する取り組みを表す項目からなっているので、「学業」因子と解釈した。第4因子までの累積寄与率は62.883%で

あった。したがって、大久保・青柳（2004）の中高生用学校生活尺度の3因子にサークル・部活動を加えた4因子が抽出された。

尺度の信頼性を求めたところ、クロンバッックの α 係数は、第1因子が.901、第2因子が.858、第3因子が.931、第4因子が.822であった。したがって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。なお、各因子に含まれる項目の得点を合計し、それぞれ「友人との関係」得点、「教員との関係」得点、「サークル・部活動」得点、「学業」得点とした。

Table 2 大学生活尺度因子分析結果

質問項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
I 友人との関係 ($\alpha=.901$)				
仲の良い友人がたくさんいる	.819	.109	.138	.138
気軽に話しかける友人がたくさんいる	.800	.089	.206	.112
悩みを打ち明けあえる友人がいる	.785	.160	.195	-.083
友人は私の気持ちをわかってくれる	.739	.188	.256	.054
友人に好かれている	.639	.047	.079	.116
友人と一緒にいると楽しい	.634	.138	.205	.046
同じことに興味をもっている友人がいる	.569	.108	.320	.178
II 教員との関係 ($\alpha=.858$)				
先生は学生の相談にのってくれる	.011	.793	.012	.124
先生は学生の言うことを真剣に聞いてくれる	.164	.756	.092	.173
先生は学生の気持ちをわかってくれる	.178	.727	.055	.150
困っているときに先生は励ましてくれる	.175	.715	.025	.156
先生はわかりやすく教えてくれる	.144	.540	.081	.349
先生は学生に公平に接してくれる	.065	.486	.055	.202
III サークル・部活動 ($\alpha=.931$)				
サークルや部活動には自主的に参加している	.230	-.027	.873	.050
自分のサークルや部活動は希望して入った所である	.292	.048	.848	.079
サークルや部活動をやることにやりがいを感じる	.322	.094	.800	.025
自分のサークルや部活動は仲のよい楽しい集団である	.381	.153	.758	-.049
IV 学業 ($\alpha=.822$)				
成績を上げるために努力をしている	.084	.011	.038	.716
一生懸命勉強している	.188	.144	-.067	.714
勉強に楽しく取り組んでいる	.231	.188	-.035	.629
授業をはじめにうけている	-.104	.122	.145	.625
授業の内容を理解している	.055	.276	-.019	.611
先生の言うことをきちんと守っている	-.016	.208	.216	.500
勉強でわからないことはそのままにしない	.069	.256	-.099	.440
固有値	7.300	3.878	2.042	1.872
寄与率(%)	30.416	16.159	8.510	7.799
累積寄与率(%)	30.416	46.574	55.085	62.883

自律的進学動機尺度と適応感尺度の性別と時期による差の検討

まず、進学動機尺度の性別と時期による差を検討するため、自律的進学動機尺度を従属変数とし、性別（男性、女性）と時期（4月、7月）を独立変数とした2要因の分散分析を行った（Table 3）。その結果、「統合的・内的調整」得点では性別の主効果 ($F(1, 170) = 12.023, p < .001$) がみられ、女性のほうが男性よりも有意に高かった。「同一化的調整」得点では性別の主効果 ($F(1, 166) = 10.825, p < .001$) がみられ、女性のほうが男性よりも有意に高かった。「外的・取り入れ的調整」得点では時期の主効果 ($F(1, 169) = 11.915, p < .001$) がみられ、7月のほうが4月よりも有意に高かった。

「統合的・内的調整」と「同一化的調整」では、女性のほうが男性よりも得点が高いことが示されたが、進学動機の性差は学部によって異なることが示唆されている（古市, 1993）ことからも今後、各学部の人数も十分にそろえた上で検討する必要があるだろう。「外的・取り入れ的調整」では、7月のほうが4月よりも得点が高いことが示されたが、関係論の視点（大久保・黒沢, 2003）から解釈すると、大学環境との関係の変化によって消極的な動機である外的・取り入れ的調整が後付け的に意識されるようになったのかもしれない。別の解釈も可能であるといえるが、半澤（2002）が指摘しているように、進学動機の変化の可能性を考慮する必要性があることは確実であろう。

次に、適応感尺度の性別と時期による差を検討するため、適応感尺度を従属変数とし、性別（男性、女性）と時期（4月、7月）を独立変数とした2要因の分散分析を行った（Table 4）。その結果、「居心地の良さの感覚」得点では、性別の主効果 ($F(1, 170) = 22.065, p < .001$)、時期の主効果 ($F(1, 170) = 18.692, p < .001$)、性別×時期の交互作用 ($F(1, 170) = 12.097, p < .001$) がみられ、交互作用を検討した結果、女性では7月のほうが4月よりも有意に高かった。「被信頼・受容感」得点では、性別の主効果 ($F(1, 169) = 8.152, p < .01$)、時期の主効果 ($F(1, 169) = 67.452, p < .001$) がみられ、女性のほうが男性よりも有意に高く、7月のほうが4月よりも有意に高かった。「課題・目的の存在」得点では、性別の主効果 ($F(1, 171) = 7.073, p < .01$)、時期の主効果 ($F(1, 171) = 11.764, p < .001$) がみられ、女性のほうが男性よりも有意に高く、7月のほうが4月よりも有意に高かった。「拒絶感の無さ」得点では、性別の主効果 ($F(1, 169) = 7.100, p < .01$) がみられ、女性のほうが男性よりも有意に高かった。

本研究では概して、女性のほうが男性よりも大学への適応が良いことが示されたが、このことは多くの研究（例えば、二宮・高橋・桑村・稻葉・山本・宮沢, 2006; 大久保, 2005; 大久保・青柳, 2005a）で指摘されおり、納得のいく結果といえる。また、大学生用適応感尺度で適応感を測定した大久保・青柳（2005a, b）や太田・甲村・児嶋（2008）の研究と同様に、本研究でも入学後のほうが入学当初よりも適応感が高くなることが明らかになった。この変化は、大学1年生の多くが新しい環境に慣れたことによるものと考えられる。

Table 3 性別×時期ごとの自律的進学動機尺度の平均値と2要因分散分析結果

	男子		女子		2要因分散分析		
	4月	7月	4月	7月	性別F値	時期F値	交互作用F値
外的・取り入れ的調整	22.671 (6.906)	23.566 (7.276)	20.147 (7.396)	22.063 (7.199)	3.806	11.915***	1.573
統合的・内的調整	13.974 (4.729)	13.539 (4.354)	16.330 (4.880)	15.830 (4.576)	12.023***	3.795	.018
同一化的調整	23.276 (4.168)	23.040 (4.244)	25.011 (3.363)	24.913 (4.404)	10.825***	.299	.052

カッコ内は標準偏差

***p<.001

Table 4 性別×時期ごとの適応感尺度の平均値と2要因分散分析結果

	男性		女性		2要因分散分析		
	4月	7月	4月	7月	性別F値	時期F値	交互作用F値
居心地の良さの感覚	31.494 (5.598)	31.831 (6.042)	34.021 (5.602)	37.137 (6.727)	22.065***	18.692***	12.097***
被信頼・受容感	16.539 (3.754)	18.462 (3.870)	17.656 (2.846)	20.075 (3.757)	8.152**	67.452***	.801
課題・目的の存在	22.897 (3.897)	24.064 (5.120)	24.432 (4.440)	25.832 (5.313)	7.073**	11.764***	.097
拒絶感の無さ	21.782 (3.674)	21.705 (3.749)	22.968 (4.148)	23.441 (4.169)	7.100**	.566	1.091

カッコ内は標準偏差

p<.01 *p<.001

大学生活尺度の性別による差の検討

大学生活尺度の性差を検討するために、大学生活尺度を従属変数とし、性別（男性、女性）を独立変数としたt検定を行った（Table 5）。その結果、「友人との関係（7月）」得点（ $t = 5.353$, $df = 177$, $p < .001$ ）と「サークル・部活動（7月）」得点（ $t = 2.826$, $df = 176$, $p < .01$ ）において、女性のほうが男性よりも有意に高かった。

女性のほうが男性よりも「友人との関係」得点が高いことが示されたが、梅本（1992）の研究で友人関係の親密さは女性のほうが男性よりも高いことが明らかになっていることからも、納得のいく結果といえる。また、女性のほうが男性よりも「サークル・部活動」得点が高いことも示されたが、大学生はサークルや部活動などの課外活動を友人を作る場ととらえていることが指摘されている（関, 2003）ことからも、サークルや部活動と友人関係は独立した領域ではないのかもしれない。したがって、友人関係に積極的な女性のほうが、サークルや部活動に積極的なのだと見える。

Table 5 性別ごとの大学生活尺度の平均値とt検定結果

	男性	女性	t値
友人との関係(7月)	23.924 (4.851)	28.010 (5.336)	5.353***
教員との関係(7月)	17.000 (3.609)	17.130 (4.242)	.217
サークル・部活動(7月)	14.295 (4.564)	16.200 (4.330)	2.826**
学業(7月)	21.532 (4.709)	22.360 (4.382)	1.215

カッコ内は標準偏差

*** $p < .001$

自律的進学動機と適応感の関連の検討

4月と7月の自律的進学動機と4月と7月の適応感の関連を検討するため、まず、4月の自律的進学動機尺度を説明変数とし、4月の適応感尺度を目的変数として重回帰分析を行った (Table 6)。その結果、「外的・取り入れ的調整 (4月)」においては、「課題・目的の存在 (4月)」 ($\beta = -.210$, $p < .001$)、「拒絶感の無さ (4月)」 ($\beta = -.299$, $p < .001$) との間に有意な負の関連が認められた。「統合的・内的調整 (4月)」においては、「居心地の良さの感覚 (4月)」 ($\beta = .375$, $p < .001$)、「被信頼・受容感 (4月)」 ($\beta = .358$, $p < .001$)、「課題・目的の存在 (4月)」 ($\beta = .367$, $p < .001$) との間に有意な正の関連が認められた。「同一化的調整 (4月)」においては、「居心地の良さの感覚 (4月)」 ($\beta = .172$, $p < .01$)、「課題・目的の存在 (4月)」 ($\beta = .153$, $p < .01$)、「拒絶感の無さ (4月)」 ($\beta = .207$, $p < .001$) との間に有意な正の関連が認められた。

次に、7月の自律的進学動機尺度を説明変数とし、7月の適応感尺度を目的変数として重回帰分析を行った (Table 7)。「外的・取り入れ的調整 (7月)」においては、「居心地の良さの感覚 (7月)」 ($\beta = -.164$, $p < .05$)、「課題・目的の存在 (7月)」 ($\beta = -.206$, $p < .01$)、「拒絶感の無さ (7月)」 ($\beta = -.271$, $p < .001$) との間に有意な負の関連が認められた。「統合的・内的調整 (7月)」においては、「居心地の良さの感覚 (7月)」 ($\beta = .263$, $p < .001$)、「被信頼・受容感 (7月)」 ($\beta = .279$, $p < .001$)、「課題・目的の存在 (7月)」 ($\beta = .248$, $p < .001$)、との間に有意な正の関連が認められた。「同一化的調整 (7月)」においては、「居心地の良さの感覚 (7月)」 ($\beta = .371$, $p < .001$)、「被信頼・受容感 (7月)」 ($\beta = .212$, $p < .01$)、「課題・目的の存在 (7月)」 ($\beta = .313$, $p < .001$)、「拒絶感の無さ (7月)」 ($\beta = .333$, $p < .001$) との間に有意な正の関連が認められた。

最後に、4月の自律的進学動機尺度を説明変数とし、7月の適応感尺度を目的変数として重回帰分析を行った (Table 8)。その結果、「外的・取り入れ的調整 (4月)」においては、「居心地の良さの感覚 (7月)」 ($\beta = -.182$, $p < .05$)、「課題・目的の存在 (7月)」 ($\beta = -.216$, $p < .01$)、「拒絶感の無さ (7月)」 ($\beta = -.340$, $p < .001$) との間に有意な負の関連が認められた。「統合的・内的調整 (4月)」においては、「居心地の良さの感覚 (7月)」 ($\beta = .327$, $p < .001$)、「被信頼・受容感 (7月)」 ($\beta = .287$, $p < .001$)、「課題・目的の存在 (7月)」 ($\beta = .298$, $p < .001$) との間に有意な正の関連が認められた。「同一化的調整 (4月)」においては、「居心地の良さの感覚 (7月)」 (β

= .231, p<.01)、「課題・目的の存在（7月）」(β = .230, p<.01)、「拒絶感の無さ（7月）」(β = .325, p<.001)との間に有意な正の関連が認められた。

以上の結果から、概して、4月の進学動機は4月の適応感と関連を示し、7月の進学動機は7月の適応感と関連を示すことが明らかとなった。先行研究と同様に、同時期において進学動機と適応感が関連を示したことは納得のいく結果といえる。また、概して、4月の進学動機は7月の適応感と関連を示すことが明らかとなった。しかし、「外的・取り入れ的調整（4月）」と「居心地の良さの感覺（4月）」との間では関連が認められなかったが、「外的・取り入れ的調整（7月）」と「居心地の良さの感覺（7月）」との間で負の関連が認められ、「外的・取り入れ的調整（4月）」と「居心地の良さの感覺（7月）」との間でも負の関連が認められた。また、「同一化的調整（4月）」と「被信頼・受容感（4月）」との間では関連が認められず、「同一化的調整（4月）」と「被信頼・受容感（7月）」との間でも関連が認められなかったが、「同一化的調整（7月）」と「被信頼・受容感（7月）」との間では正の関連が認められた。こうした関連の変化を勘案すると、4月の進学動機が後の適応感を予測するとは早急に結論づけることはできないかもしれない。今後、半澤（2002）が指摘しているように、進学動機の変化の可能性も考慮して、適応について検討していく必要があるといえる。

Table 6 自律的進学動機尺度(4月)と適応感尺度(4月)との関連

	居心地の良さの感覺 (4月)	被信頼・受容感 (4月)	課題・目的の存在 (4月)	拒絶感の無さ (4月)
外的・取り入れ的調整(4月)	-.078	.053	-.210***	-.299***
統合的・内的調整(4月)	.375***	.358***	.367***	.092
同一化的調整(4月)	.172**	.046	.153**	.207***
重相関係数	.450***	.381***	.459***	.331***

値は標準偏回帰係数

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 7 自律的進学動機尺度(7月)と適応感尺度(7月)との関連

	居心地の良さの感覺 (7月)	被信頼・受容感 (7月)	課題・目的の存在 (7月)	拒絶感の無さ (7月)
外的・取り入れ的調整(7月)	-.164*	-.076	-.206**	-.271***
統合的・内的調整(7月)	.263***	.279***	.248***	.005
同一化的調整(7月)	.371***	.212**	.313***	.333***
重相関係数	.518***	.402***	.469***	.371***

値は標準偏回帰係数

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 8 自律的進学動機尺度(4月)と適応感尺度(7月)との関連

	居心地の良さの感覚 (7月)	被信頼・受容感 (7月)	課題・目的の存在 (7月)	拒絶感の無さ (7月)
外的・取り入れ的調整(4月)	-.182*	-.081	-.216**	-.340***
統合的・内的調整(4月)	.327***	.287***	.298***	.092
同一化的調整(4月)	.231**	.111	.230**	.325***
重相関係数	.463***	.339***	.446***	.424***

値は標準偏回帰係数

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

自律的進学動機の個人差による検討

永作・新井（2005）の研究に倣い、調査協力者を4月の自律的進学動機の各下位尺度得点の高低によって特徴的なパターンに分類し、4月、7月における適応感と7月の大学生活の差を検討した。まず、4月の自律的進学動機の各下位尺度をz得点に換算し、その値に基づいてクラスター分析を行った。各クラスターに含まれる対象者の数、クラスターの解釈可能性、理論的整合性から総合的に判断した結果、永作・新井（2005）と同様に3クラスターによる分類が自律的進学動機のパターンをもっとも表していると考えられた。Figure 1は、3クラスター分類における、クラスターごとの自律的進学動機尺度の標準得点の最終クラスター中心を示したものである。各クラスターの特徴は、

第1クラスター：外的・取り入れ的調整が相対的に最も低く、次いで統合・内的調整、同一化的調整という順に高くなる群（自律的動機づけ群）

第2クラスター：外的・取り入れ的調整が相対的に最も高く、次いで統合・内的調整、同一化的調整という順に低くなる群（他律的動機づけ群）

第3クラスター：すべての動機が低い群（無動機づけ群）

であると解釈できる。自己決定理論によれば、動機づけは自己決定性という軸によって1次元上に連続体として並べることができるとされている。永作・新井（2005）の研究と同様に、これら3つのクラスターはこのような理論的背景をよく反映していると考えられる。なお、それぞれの群の内訳は、自律的動機づけ群が58名、他律的動機づけ群が70名、無動機づけ群が42名であった。

まず、自律的進学動機のクラスターパターンと4月、7月における適応感の関係を検討するため、各時点における適応感尺度を従属変数とし、自律的進学動機のクラスターパターン（自律的動機づけ群、他律的動機づけ群、無動機づけ群）を独立変数とした1要因の分散分析を行った（Table 9）。4月と7月の「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「課題・目的の存在」「拒絶感の無さ」において、3群間に有意な差が認められたので、Tukey法による多重比較を行った。その結果、「居心地の良さの感覚（4月）」（F（2, 167） = 7.464, p<.001）、「課題・目的の存在（4月）」（F（2, 167） = 8.339, p<.001）、「居心地の良さの感覚（7月）」（F（2, 166） = 10.157, p<.001）、「被信頼・受容感（7月）」（F（2, 167） = 3.836, p<.05）、「課題・目的の存在（7月）」（F（2, 167） = 13.785, p<.001）では、「自律的動機づけ群」と「他律的動機づけ群」が「無動機づけ群」よりも得点が有意に高かった。「被信頼・受容感（4月）」（F（2, 165） = 3.272, p<.05）では、「他律的動機づけ群」が「無

動機づけ群」よりも得点が有意に高かった。「拒絶感の無さ（4月）」(F (2, 167) = 8.309, p<.001)では、「自律的動機づけ群」が「他律的動機づけ群」と「無動機づけ群」よりも得点が有意に高かった。「拒絶感の無さ（7月）」(F (2, 167) = 7.634, p<.001)では、「自律的動機づけ群」が「無動機づけ群」よりも得点が有意に高かった。

4月の「拒絶感の無さ」を除くと、「自律的動機づけ群」と「他律的動機づけ群」の間に適応感の差は認められないことが明らかとなった。また、永作・新井（2005）の研究の結果と同様に、「無動機づけ群」の適応感がもっとも低く、無動機づけ状態で進学することが適応感の低さと関係することが明らかとなった。このことは、自律的な動機で進学した学生でも他律的な進学動機で進学した学生でも、大学に入学してしまうとどのような動機で入学したかは適応と関係しないことを意味している。つまり、積極的でも消極的でもなぜ大学へ進学したのかという理由があれば適応に違ひはないといえる。一方、無動機づけの際には、人は全く行動を起こさない、もしくはただ意味もなく行動するとされている（Ryan & Deci, 2000）ように、「無動機づけ群」はなぜ大学へ進学したのかという理由が無いため、適応が良くないのだと考えられる。

次に、自律的進学動機のパターンと7月における大学生活との関係を検討するため、7月の大学生活尺度を従属変数とし、自律的進学動機のクラスターパターン（自律的動機づけ群、他律的動機づけ群、無動機づけ群）を独立変数とした1要因の分散分析を行った（Table 10）。「友人との関係（7月）」(F (2, 166) = 12.779, p<.001)、「サークル・部活動（7月）」(F (2, 165) = 18.072, p<.001)において、3群間に有意な差が認められたので、Tukey法による多重比較を行った。その結果、「友人との関係（7月）」と「サークル・部活動（7月）」では、「自律的動機づけ群」と「他律的動機づけ群」が「無動機づけ群」よりも得点が有意に高かった。

「無動機づけ群」の友人との関係とサークル部活動の得点がもっとも低く、無動機づけ状態で進学することが友人との関係の悪さやサークル・部活動への消極さと関係することが明らかとなった。前述のように、「無動機づけ群」はなぜ大学へ進学したのかという意識が無いため、適応するのに重要な要因である友人関係やサークル・部活動に対して積極的ではないのだと考えられる。

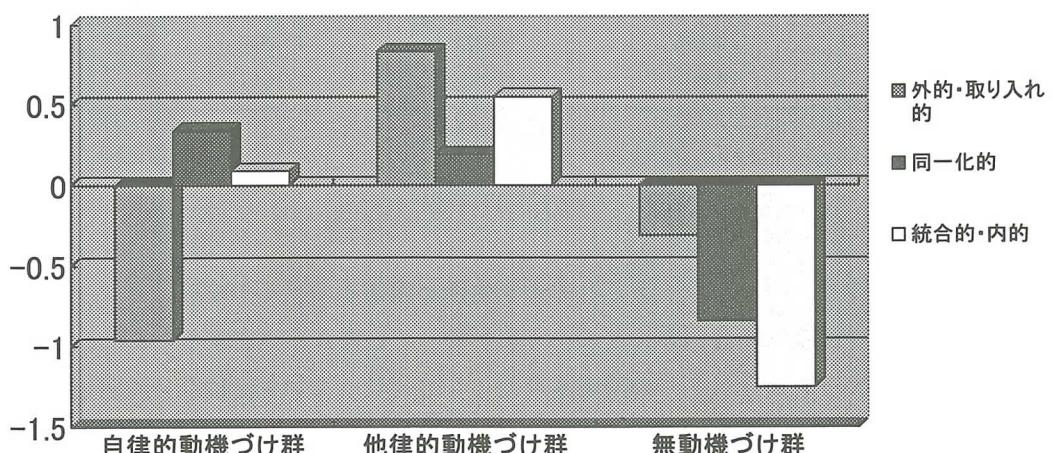


Figure 1 自律的進学動機尺度のクラスターパターン

Table 9 自律的進学動機のクラスター・パターンごとの適応感尺度(4月、7月)の平均値と1要因分散分析結果

	自律的動機づけ群	他律的動機づけ群	無動機づけ群	F値
居心地の良さの感覚(4月)	34.207 (5.515)	33.586 (5.953)	30.119 (4.759)	7.464*** 自律, 他律>無動機
被信頼・受容感(4月)	17.482 (3.454)	17.529 (3.387)	16.000 (2.963)	3.272* 他律>無動機
課題・目的の存在(4月)	25.397 (4.184)	23.471 (3.937)	22.071 (4.262)	8.339*** 自律, 他律>無動機
拒絶感の無さ(4月)	24.122 (3.798)	21.743 (3.971)	21.429 (3.507)	8.309*** 自律>他律, 無動機
居心地の良さの感覚(7月)	36.810 (6.477)	35.652 (6.951)	31.048 (5.979)	10.157*** 自律, 他律>無動機
被信頼・受容感(7月)	19.845 (3.703)	19.900 (3.887)	18.000 (3.819)	3.836* 自律, 他律>無動機
課題・目的の存在(7月)	27.172 (4.660)	25.300 (5.226)	21.976 (4.646)	13.785*** 自律, 他律>無動機
拒絶感の無さ(7月)	24.105 (3.663)	22.580 (4.142)	21.048 (3.656)	7.634*** 自律>無動機

カッコ内は標準偏差

*p<.05 ***p<.001

Table 10 自律的進学動機のクラスター・パターンごとの大学生活尺度の平均値と1要因分散分析結果

	自律的動機づけ群	他律的動機づけ群	無動機群づけ群	F値
友人との関係(7月)	28.017 (4.958)	27.100 (5.317)	22.951 (5.059)	12.779*** 自律, 他律>無動機
教員との関係(7月)	16.845 (3.769)	17.200 (4.542)	17.024 (3.630)	.121
サークル・部活動(7月)	17.175 (3.048)	15.957 (4.080)	12.220 (5.341)	18.072*** 自律, 他律>無動機
学業(7月)	22.466 (4.430)	22.271 (4.475)	21.268 (5.075)	.897

カッコ内は標準偏差

***p<.001

自律的進学動機のクラスター・パターンごとの大学生活と適応感の関連の検討

大学生活の要因が適応感の各側面にどのように影響しているかを検討するために、自律的進学動機のクラスター・パターンごとに7月の適応感尺度を目的変数、大学生活尺度を説明変数とした重回帰分析を行った (Table 11-13)。

自律的動機づけ群では、Table 11に示す結果になった。「友人との関係 (7月)」では、「居心地の良さの感覚 (7月)」 ($\beta = .826$, $p < .001$)、「被信頼・受容感 (7月)」 ($\beta = .635$, $p < .001$)、「課題・

目的の存在（7月）」（ $\beta = .545$, $p < .001$ ）との間に有意な正の関連が認められた。「サークル・部活動（7月）」では、「課題・目的の存在（7月）」（ $\beta = .325$, $p < .01$ ）との間に有意な正の関連が認められた。

他律的動機づけ群では、Table 12に示す結果になった。「友人との関係（7月）」では、「居心地の良さの感覚（7月）」（ $\beta = .738$, $p < .001$ ）、「被信頼・受容感（7月）」（ $\beta = .561$, $p < .001$ ）、「課題・目的の存在（7月）」（ $\beta = .526$, $p < .001$ ）、「拒絶感の無さ（7月）」（ $\beta = .608$, $p < .001$ ）との間に有意な正の関連が認められた。「教員との関係（7月）」では、「居心地の良さの感覚（7月）」（ $\beta = .184$, $p < .05$ ）、「被信頼・受容感（7月）」（ $\beta = .263$, $p < .01$ ）、「課題・目的の存在（7月）」（ $\beta = .298$, $p < .001$ ）との間に有意な正の関連が認められた。「サークル・部活動（7月）」では、「課題・目的の存在（7月）」（ $\beta = .229$, $p < .01$ ）との間に有意な正の関連が認められた。

無動機づけ動機群では、Table 13に示す結果になった。「友人との関係（7月）」では、「居心地の良さの感覚（7月）」（ $\beta = .765$, $p < .001$ ）、「被信頼・受容感（7月）」（ $\beta = .754$, $p < .001$ ）、「課題・目的の存在（7月）」（ $\beta = .503$, $p < .001$ ）、「拒絶感の無さ（7月）」（ $\beta = .464$, $p < .05$ ）との間に有意な正の関連が認められた。「学業（7月）」では、「課題・目的の存在（7月）」（ $\beta = .290$, $p < .05$ ）との間に有意な正の関連が認められた。

以上のように、大学生活の要因が適応感に及ぼす影響の仕方について、自律的進学動機のクラスターパターンごとに違いがみられた。「友人との関係」については、いずれの自律的進学動機のクラスターパターンにおいても、大学への適応感に強い正の影響を及ぼしていた。大久保（2005）の研究で、友人関係が強く適応感に影響することが指摘されていることからも納得のいく結果といえる。「教員との関係」については、他律的動機づけ群でのみ、大学への適応感に正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。これは、他者からの影響を受けやすい他律的動機づけ群の特徴によるものと考えられる。「サークル・部活動」については、無動機づけ群でのみ、大学への適応感に影響を及ぼしていなかった。これは、無動機づけ群がサークルや部活動への積極性が低いため、適応と結びつかなかつたと考えられる。「学業」については、無動機づけ群でのみ大学への適応感の「課題・目的の存在」に影響を及ぼしていたが、他の群では大学への適応感に影響を及ぼしていなかった。大久保（2005）の研究で、中高生では、学業が適応感に影響を及ぼすかどうかは学校ごとに異なることが明らかになっていることからも、この結果は香川大学の特徴が反映されている可能性があるといえる。

Table 11 自律的動機づけ群における大学生活尺度と適応感尺度との関連

	居心地の良さの感覚 (7月)	被信頼・受容感 (7月)	課題・目的の存在 (7月)	拒絶感の無さ (7月)
友人との関係(7月)	.826***	.635***	.545***	.123
教員との関係(7月)	.043	-.135	.023	-.012
サークル・部活動(7月)	-.024	.174	.325**	.100
学業(7月)	.008	.089	.060	.152
重相関係数	.831***	.711***	.772***	.262

値は標準偏回帰係数

** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 12 他律的動機づけ群における大学生活尺度と適応感尺度との関連

	居心地の良さの感覚 (7月)	被信頼・受容感 (7月)	課題・目的の存在 (7月)	拒絶感の無さ (7月)
友人との関係(7月)	.738***	.561***	.526***	.608***
教員との関係(7月)	.184*	.263**	.298***	.044
サークル・部活動(7月)	.088	.105	.229**	.020
学業(7月)	-.041	.056	.036	-.117
重相関係数	.879***	.807***	.865***	.607***

値は標準偏回帰係数

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 13 無動機づけ群における大学生活尺度と適応感尺度との関連

	居心地の良さの感覚 (7月)	被信頼・受容感 (7月)	課題・目的の存在 (7月)	拒絶感の無さ (7月)
友人との関係(7月)	.765***	.754***	.503***	.464*
教員との関係(7月)	-.103	-.118	-.048	-.136
サークル・部活動(7月)	.112	.001	.227	-.034
学業(7月)	.089	.170	.290*	.072
重相関係数	.826***	.765***	.714***	.453†

値は標準偏回帰係数

†p<.1 *p<.05 ***p<.001

総合考察

本研究では、大学生活への適応の問題と直面する大学新入生を対象とし、自律的進学動機と大学生活への適応との関連を縦断的に検討した。具体的には、まず、4月と7月において自律的進学動機と適応感がどのように変化し、関連するのかについて検討した。その結果、概して、進学動機は適応感と関連を示すことが明らかとなったが、調査時期によって「外的・取り入れ的調整」と「居心地の良さの感覚」の関連と「同一化的調整」と「被信頼・受容感」の関連において変化が認められた。次に、自律的進学動機の得点から群分けを行い、群ごとに大学生活の要因と大学への適応感に違いがあるのかを検討した。その結果、「自律的動機づけ群」と「他律的動機づけ群」のほうが「無動機づけ群」よりも適応感が高かった。最後に、群ごとに大学生活の要因が大学への適応感にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、群ごとに大学への適応感を規定する要因の構造は異なっていることが明らかとなった。

大学1年生が大学へ適応していく過程において、入学当初の進学動機は後の適応感にも影響を及ぼしていることが明らかとなったが、調査時期によって「外的・取り入れ的調整」と「居心地の良さの感覚」の関連と「同一化的調整」と「被信頼・受容感」の関連において変化が認められたことから、入学当初の進学動機が時期が変わっても後の適応に同様の影響を与え続けると早急に結論づけること

はできないだろう。時期によって進学動機の変化があったことや進学動機と適応の関連の変化があつたことを関係論の視点から考えると、関係は常に変化しており、動機も変化していくので（大久保・黒沢, 2003）、入学してからの大学環境との関係の変化が進学動機の意識を強めたり、進学動機と適応の関連を変化させたのかもしれない。ただし、これは解釈の一つの視点であり、今後、さらに検討を行っていく必要があるだろう。その際、半澤（2002）が指摘するように、意味づけの変化を考慮する必要があるといえる。

「自律的動機づけ群」と「他律的動機づけ群」のほうが「無動機づけ群」よりも適応感が高いことが明らかとなつたが、永作・新井（2005）の研究とは異なり、ほほどの時期においても「自律的動機づけ群」と「他律的動機づけ群」の間に差は認められなかつた。このことを個人と環境の適合性の視点（大久保・加藤, 2005）から解釈すると、他律的動機づけ群のように消極的な動機で大学に進学した学生でも、自由な大学の雰囲気とは不適合にならず、適応の問題に至らないのかもしれない。むしろ、永作・新井（2005）の研究と同様に、無動機づけで大学に入学してしまつた学生が不適応であることに注目する必要があるだろう。こうした学生にとって大学の自由な雰囲気は不適合になりやすく、適応の問題を抱えるのかもしれない。

群ごとに大学への適応感を規定する要因の構造は異なつてゐることが明らかとなつたが、こうした本研究の結果は、入学してくる学生への支援や援助という点に関して次のような示唆をもつと思われる。どの群においても「友人との関係」が大学への適応感に正の影響を及ぼしていたことからも、入学してすぐに友人関係を築ける場を多く提供することが重要であるといえる。香川大学では生協学生委員会主催で新入生の集いが行われているが、おそらくこうした取り組みは新入生の大学生活への適応への支援や援助として有効なものであると考えられる。「教員との関係」については、他律的動機づけ群のみ、大学への適応感に正の影響を及ぼしていたことからも、他律的動機づけ群に対しては、大学生活への適応への支援や援助として教員が積極的に関わることが考えられる。したがつて、どのような動機で入学してきたかも踏まえて支援や援助を考えていく必要があるだろう。「学業」については、無動機づけ群でのみ大学への適応感の「課題・目的の存在」に影響を及ぼしていたが、他の群では大学への適応感に影響を及ぼしていなかつた。半澤（2009）や溝上（2004）は、大学生の適応における学業の重要性を指摘しているが、本研究では、大学生の適応における学業の重要性は無動機づけ群以外では示されなかつた。これは調査を行つた香川大学の特徴であるとも考えられるが、新入生特有の問題であるかもしれない。香川大学では1年生の間は教養科目が多いことからも、学業への積極性が無動機づけ群以外は適応と結びつかなかつたのかもしれない。したがつて、一概に学業が大学適応に関連しないと結論づけられないだろう。

今後の課題としては、まず、調査協力者の問題があげられる。本研究では、理系の学部の調査協力者が少なく、学部によって協力者の数に偏りがあつた。大学進学動機は学部によって違いがある（古市, 1993）ことが指摘されていることからも、学部ごとに調査協力者を増やし、学部による進学動機や大学生活への適応の仕方の特徴についても検討する必要があるだろう。こうした検討を行うことは、大学生活への適応を学部ごとにどのように理解し、支援や援助すればよいかについての一つの指針になると考えられる。

次に、調査の実施時期の問題があげられる。本研究は4月と7月に調査を行つたが、大学1年生の前期と後期では適応に影響を及ぼす要因が大幅に異なる（太田・甲村・児嶋, 2008）ことからも、後

期も含めて調査を行っていく必要があるだろう。また、大学4年間で重視される活動は時期によって変化していく（松島・尾崎, 2008）ことからも、4年間を通して学生が適応していく過程を検討する必要があるだろう。

引用文献

- 安達智子（1999）理科系大学1年生の大学選択動機と入学後の適応について：就業動機志向による比較『進路指導研究』, 19, 22-29頁。
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior.* New York : Plenum.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1991). A motivational approach to self : Integration in personality. In R. Dienstbier (Ed.). *Nebraska Symposium on Motivation*, 38, 237-288.
- 古市裕一（1993）大学生の大学進学動機と価値意識『進路指導研究』, 14, 1-7頁。
- 半澤礼之（2002）大学生活における意味づけの変容と適応の関連の研究：大学一年生を対象とした縦断的面接調査より『大学院研究年報』文学研究科篇：中央大学, 31, 361-372頁。
- 半澤礼之（2006）大学進学動機と学業取り組み態度、学業・授業意欲低下との関連『武蔵野大学人間関係学部紀要』, 3, 123-131頁。
- 半澤礼之（2009）大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処：学業を重視して大学に入学した心理学専攻の学生を対象とした面接調査から『青年心理学研究』, 21, 31-51頁。
- 磯部有希・上村佳世子（2007）大学への進学動機と学校適応感との関連『文京学院大学人間学部研究紀要』, 9, 51-61頁。
- Kasser, V. M., & Ryan, R. M. (1999). The relation of psychological needs for autonomy and relatedness to health, vitality, well-being, and mortality in a nursing home. *Journal of Applied Social Psychology*, 29, 935-954.
- 松島るみ・尾崎仁美（2007）大学進学動機による学習意欲・授業選択態度・重視活動の変化について：2年間の縦断的調査より『研究紀要プシュケー』京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学科篇, 6, 1-14頁。
- 松島るみ・尾崎仁美（2008）学習意欲・授業選択態度・大学適応感の変遷について：3年間の縦断的調査より『研究紀要プシュケー』京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学科篇, 7, 39-48頁。
- 溝上慎一（2004）大学新入生の学業生活への参入過程：学業意欲と授業意欲『京都大学高等教育研究』, 10, 67-87頁。
- 永作稔・新井邦二郎（2003）自律的高校進学動機尺度作成の試み『筑波大学心理学研究』, 26, 175-182頁。
- 永作稔・新井邦二郎（2005）自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討『教育心理学研究』, 53, 516-528頁。
- 二宮克美・高橋彩・桑村幸恵・稻葉小由紀・山本ちか・宮沢秀次（2006）大学生の大学授業観(3)：進学動機、学部違和感、大学生活不安感との関連『愛知学院大学情報社会政策研究』, 8, 13-22頁。
- 大久保智生（2004）新入生における大学環境への主観的適応に関するPAC（個人別態度構造）分析

- 『パーソナリティ研究』, 13, 44-57頁。
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因：青年用適応感尺度の作成と学校別の検討
『教育心理学研究』, 53, 307-319頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2003) 大学生用適応感尺度作成の試み：個人一環境の適合性の視点から 『パー
ソナリティ研究』, 12, 38-39頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2004) 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 『日本福祉教育専
門学校研究紀要』, 12, 9-15頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2005a) 大学1年生における大学環境への適応感の変化の検討：大学生用適応
感尺度の作成の試み(2) 『ソーシャルモチベーション研究』, 3, 30-36頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2005b) 大学新入生の適応に関する研究：社会的スキルは後の適応を予測する
のか？ 『人間科学研究』, 18, 207-213頁。
- 大久保智生・加藤弘通 (2005) 青年期における個人一環境の適合の良さ仮説の検証：学校環境におけ
る心理的欲求と適応感との関連 『教育心理学研究』, 53, 368-380頁。
- 大久保智生・黒沢香 (2003) 関係論的アプローチによる動機づけ概念の再考 『心理学評論』, 46, 12-23
頁。
- 太田伸幸・甲村和三・児嶋文寿 (2008) 大学適応感の変化に関する一考察：教職課程履修生を対象と
した縦断調査より 『愛知工業大学研究報告』, 43, 1-10頁。
- 岡田有司 (2008) 学校生活の下位領域に対する意識と中学校への心理的適応：順応することと享受す
ることの違い 『パーソナリティ研究』, 16, 388-395頁。
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic
motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryan, R. M., Rigby, S., & King, K. (1993). Two types of religious internalization and their relations
to religious orientations and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65,
586-596.
- 佐藤典子 (2001) 音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について 『教育心理学研究』, 49,
175-185頁。
- 関豪 (2003) 課外活動に関する本学学生の実態について(1) 名古屋文理大学紀要, 3, 133-146頁。
- 梅本信章 (1992) 大学新入生の適応について：自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連
『盛岡大学紀要』, 11, 27-38頁。